監督・脚本＝セドリック・クラピッシュ／出演＝ロマン・デュリス／ジュディット・ゴドレーシュ／オドレイ・トトゥ／セシル・ド・フランス（20世紀フォックス映画配給／2001年フランス・スペイン合作映画／122分）

主人公は25歳のフランス人。スペインのバルセロナに留学した彼は７つの国から来た７人の男女と奇妙な同居生活。貧乏なための同居だが、若い時の貧乏は値打ちがある。タイトルどおりの『スパニッシュ・アパートメント』から彼は実に多くのものを学び、新たな人生へスタートした。思わず自分の学生時代を思い出しながら、ヨーロッパの若者たちの青春群像を堪能。

主人公はフランス人の大学生

主人公グザヴィエ（ロマン・デュリス）は、作家に憧れながらパリで過ごす大学生。ところが卒業を控えた彼はこれから「役人」になるには、スペイン語とスペイン経済を勉強するのが近道と言われ、急遽、「現実路線」に変更（転向）。１年間のスペインの首都バルセロナへの留学を決意した。グザヴィエの恋人マルティーヌ（オドレイ・トトゥ）は、１年間の別れを悲しむが、グザヴィエは「あくまでこれは自分の意志！」と宣言した。

留学システムはエラスムス計画

パンフレットによれば、グザヴィエの留学はヨーロッパの大学の結束と人物交流を促進するため、欧州委員会によって、1987年に開始された「エラスムス計画」に基づくもの。当初は3000人程度の学生しかいなかったが、現在は100万人以上の学生がこの計画に参加しており、欧州連合（EU）のプロジェクトの中で

も特に大きな成功例の１つと言われている、と解説されている。ヨーロッパは、このEUによって大きく変わり、2002年には「ユーロ」という共通の貨幣まで登場した。現在の小泉内閣の下、日米同盟の強化と対比して、日中関係の「冷え込み」が懸念されている。そのうちの１つの問題が、FTA（自由貿易協定）における中国の主導権発揮と日本の役割の減少。また先日は、日本（特に東京）での、中国人犯罪の増加の中、とりわけ中国人の日本への入国問題がクローズアップされて、入管行政が大きく見直された結果、中国人の日本へのビザ発給が急激に落ち込んだことが報道された。しかし、こんなことではダメ。ヨーロッパのエラスムス計画と同様の留学システムを、中国、韓国、日本を中心とした東アジアでつくっていく必要があるのではないか！　この映画を観ながらつくづくそういうことを思ったのは私だけだろうか……？

『スパニッシュ・アパートメント』でも日本のうさぎ小屋よりマシ

貧乏な学生ばかり７人が、やむをえず始めた共同生活と聞くと、どんなにハチャメチャな居住環境かと思ったが、そこは、腐ってもヨーロッパ（？）。かぐや姫の『神田川』に歌われた、「三畳一間の下宿」（学生時代の私の部屋は６畳あったが）とはレベルが違う。つまり、狭いながらも、１人１人の個室があるうえに、共同の食堂、居間があるという、貧乏ながらも最低限の、文化的な生活を営むに足りる居住環境が整っている。今、日本に来ている留学生や、短期ビザで日本に来て働いている中国人や韓国人、さらにはフィリピン人やブラジル人たちの居住環境はそりゃひどいもの。ヘタをすると、６畳１間に３、４人という実態を私は知っている……。それに比べればさすがヨーロッパ！

ヨーロッパの文明の高さに感心

また、この『スパニッシュ・アパートメント』で居住するのは若い７人の男女。ちなみにその国と名前、性別は次のとおり。

・グザヴィエ〈フランス・男〉（ロマン・デュリス）
・ウェンディ〈イギリス・女〉（ケリー・ライリー）
・ソレダ〈スペイン・女〉（クリスティナ・ブロンド）

・アレッサンドロ〈イタリア・男〉(フェデリコ・ダナ)
・トビアス〈ドイツ・男〉(バーナビー・メッチュラート)
・ラース〈デンマーク・男〉(クリスチャン・パグ)

当初はこの6人だったが、家主からの一方的な賃料の値上げ通告のため、新たにイザベル〈ベルギー・女〉(セシル・ド・フランス)が加わった。これによって男4名、女3名の構成となったわけだ。男女7名の共同生活ともなると、そりゃ大変。部屋のそうじ、風呂の入り方のルールから冷蔵庫の中の置き場所まで、実にさまざまなルールが必要。そしてこれは、厳しすぎてもダメだし、逆に甘すぎてもダメ。その兼ね合いが難しい。また若い男女だから、当然彼氏や彼女、そして友人の出入りも多く、これらの許容範囲の定め方も難しい。しかしこれも感心するのは、「さすがヨーロッパ人！」ということ。少し西欧文明を持ち上げすぎかもしれないが、日本人の男女7人の共同生活では、多分こうはいかないだろう。もちろんプラスワンとなったイザベルの入居も、先住者6人全員の面接の結果の合意によるもの。そしてまた、自分の部屋に彼(女)を連れ込んだり(?)、ウェンディが弟を長期滞在させたりするのも、西欧人の合理主義に基づいているらしく、実にうまく機能している。つまり、プライバシーの尊重とパブリック生活との調和がうまくとれているということ。2時間2分の上映時間中、私はずっとこういうことに感心しながら、この映画を観ていた。

若い男女の青春群像

この映画は、若い男女7人の青春群像を描く中で、主人公グザヴィエの成長する姿をテーマとしたもの。もっとも、青春群像といっても、若い男女のこと。勉強をしている部分も少しはあるが、これを描いても映画としては面白くない。したがって勉強面はホンの少しだけで、99%は友情と恋愛が話のネタ。当然のことだろう。そこで、その友情と恋愛、とりわけ例によって、スケベおやじ特有の、恋愛に焦点をあてた青春群像のいくつかを紹介しよう。

その1　グザヴィエの第1の女性

グザヴィエの女性関係は3人。まず本命は、パリに残した恋人のマルティー

ヌ。別れを惜しんでくれた彼女をパリに残し、グザヴィエは結構バルセロナのまちとその環境を愛し、楽しんでいた。だからマルティーヌが１人バルセロナにかけつけてきても、２人だけの特別の時間や場所を十分にとろうとせず、アパートの部屋のベッドで……。しかし、マルティーヌはそんなグザヴィエに不満。何となく気まずい中、ケンカ別れ状態に近い最後のキス。そしてその後、ホントに「別れましょう！」という電話が……。さて、グザヴィエはどうするのか？

その２　グザヴィエの第２の女性

グザヴィエがバルセロナで最初に好意をもった女性は、授業で知り合ったベルギー出身のイザベル。彼女は何でも積極的でハキハキとしたイイ女。賃料の値上げ通告を受けたため、１人同居者を増やさなければならなくなった時、グザヴィエは躊躇なく彼女を推薦。他の同居者もOKとなり、同居を始めた。そして新たな恋愛のスタートかと思ったら何と彼女はレズビアン。恋人（？）の女性とアパートの中で仲良くやることに……。そのイザベルが、マルティーヌとの仲に悩むグザヴィエに教えたのは、何と「女性の愛し方」。そりゃ、レズビアンだからお手のもの。彼女から教わったセックステクニックをグザヴィエは何と美しい人妻アンヌ・ソフィ（ジュディット・ゴドレーシュ）に試すことに……。

その３　グザヴィエの第３の女性

アンヌ・ソフィはちょっと嫌味な医師ジャンの妻。グザヴィエが最初ちょっと強引に迫ると、アンヌは少し嫌がっていたが、あとはメロメロ。一気呵成。グザヴィエも「SEXとはこんなにいいものだったのか」と大満足。そしてその後も２人のラブラブの関係は続いていたが……。もちろん、この不倫関係はいつまでも続くはずはなく、グザヴィエが帰国する１年後には……？　このようにグザヴィエは、バルセロナへの留学中、３人の女性と……。何ともうらやましい限り。もっとも、自分の学生時代を振り返ってみれば、同じようなものか……？

その４　ウェンディの彼氏は？

ウェンディはイギリス人女性で真面目タイプ。勉強は真面目にやっている様子

だし、部屋のそうじや片づけにもわりと口うるさい。そしてパーティーや飲み会はあまり好きではない。ところがある日、同居者みんなと出かけたパーティーで、ウェンディは突然「ギターを弾く男」に惚れてしまった。みんなから、「あのバカに……？」と言われると、ウェンディは「バカはわかっているが、SEXフレンドとして最高なんだ」と返事。全くあっけらかんで、うらやましい限り。ところがウェンディにも本命の恋人アリステアがいた。今日もギター男とベッドの中でお楽しみ中のウェンディのもとへ、アリステアが突然やって来た。花束を持って、ウェンディを驚かせるためだ。これはヤバイ！

この非常事態（？）を知った同居者たちは、急遽結束。ウソで固めたとっさの知恵とお芝居で、何とかこの危機を切り抜けたが……。こんな真の（？）友情は、多分学生時代にしか発揮できないもの。しかし、よく考えてみれば、昔、俺にもこれに近い経験が……。

その他テンコ盛りの青春群像

その他この映画には、７人の男女の１年間の共同生活から生まれる友情と恋愛の青春群像がテンコ盛り。それをたっぷりと楽しめばいい。ただ難点は、例によって、私たち日本人の目には、一見してＡ君やＢ君、Ｃ嬢、Ｄ嬢とわかりにくいこと。また名前がややこしいため、顔と名前がすぐに一致しないこと。それでも、この映画では、各人の顔とパーソナリティを理解することが可能で、十分楽しむことができる。グザヴィエと本命の恋人マルティーヌとの恋の行方はいかに？　というのが１つのテーマだが、私にはそれ以上に、人妻のアンヌや魅力的なレズビアンの女性イザベルの人物像がすごく面白かった。

グザヴィエはどんな人生をスタートするのか？

グザヴィエがバルセロナへスペイン語とスペイン経済の勉強のため１年間留学したのは、もともとは、父親のコネでお役所の大物から就職のために有利だというアドバイスを受けて、その気になったため。したがって１年間の留学が終わればパリへ戻り、公務員に就職する予定だった。

バルセロナでの送別パーティーを終え、無事パリに帰国したグザヴィエは、今

日は初の登庁日。スーツを着てネクタイを締めた、社会人1年生のグザヴィエは、オフィスの自分の部屋に案内され、ファイルを示されながら、仕事の打合せ。親切に新入社員に対して説明する2人の先輩。ところがこの時、突然、グザヴィエがいなくなった……。

そう、グザヴィエはここでやっと、これは自分が探していた人生ではないと気がつき、オフィスから逃げ出してしまったのだ。そして自宅へ。服を脱ぎ、上半身ハダカとなってパソコンと向かい合う。そう、グザヴィエは小説家になりたいという自分の夢に向かって、今やっと本当のスタートをしたのだ。

このラストの描き方は最高。やはりこうでなくっちゃ！　1年間留学して散々楽しみ、社会人になった途端、真面目に公務員になりましたとサ、では何のこっちゃ……と思うだけ。これからが、本当に混沌とした人生のスタートだし、1年間の混沌とした『スパニッシュ・アパートメント』での貴重な体験は、そんな新たな人生の糧となるものなのだ！　グザヴィエ頑張れ！

美しいバルセロナのまちとオシャレな音楽

グザヴィエがホントにバルセロナのまちを愛していたことが、この映画ではよく描かれている。スペイン女性のソレダは出番が少ないが、魅力的な女性で、自分の国スペインを愛していることを強くメッセージしている。また、コーヒー1杯でねばって勉強していたグザヴィエに話しかけてきて、以降、友人となったレストランの親父も、いかにもスペイン人らしく陽気で人間好き。また、パリからやって来た恋人のマルティーヌを案内したり、人妻のアンヌとデートしたり、「グザヴィエが女だったら良かったのにね」と変な会話をかわしながら魅力的な女性イザベルとデートしたのは、すべて美しいバルセロナのまち。

私は石畳の多いヨーロッパのまちが大好き。ホントに美しく魅力的なまちだと思う。そしてさまざまなシーンで効果的に流れるのは、いかにもスペイン風で、映画にうまくマッチした音楽。若い男女が、友情や恋愛について悩み楽しみながら成長していく姿を、音楽がうまく盛り上げている。こういうリズム感のある映画は観ていてホントに楽しいものだ。

2004(平成16)年3月5日記